瀬戸内国際芸術祭 2022

取組方針

2020 年 7 月 28 日

瀬戸内国際芸術祭実行委員会

目　次

第１章　開催趣旨
「海の復権」..... 1
瀬戸内国際芸術祭 2022 に向けて..... 3

第２章　開催概要
２-１　名称・会期・会場等..... 4
２-２　重点的な取組みの視点..... 6

第３章　ＡＲＴ　ＳＥＴＯＵＣＨＩ活動
３-１　方針..... 8
３-２　具体的な取組み..... 8

第４章　アートプロジェクト
４-１　方針..... 9
４-２　会場ごとの事業展開..... 10
４-３　アーティスト選考..... 25

第５章　受入環境の整備
５-１　方針..... 26
５-２　海上交通..... 26
５-３　島内交通..... 26
５-４　本土側のアクセス..... 27
５-５　混雑対策..... 27
５-６　芸術祭鑑賞ツアー..... 27
５-７　警護・救急体制の整備..... 27

第６章　広報
６-１　方針..... 28
６-２　情報発信活動..... 28
６-３　広報ツール..... 29

第７章　来場者への情報提供
7-1　方針..... 30
7-2　公式ウェブサイト..... 30
7-3　モバイル用アプリ..... 30
7-4　紙媒体..... 31
7-5　案内所の設置..... 31

第８章　芸術祭サポーター
8-1　方針..... 32
8-2　ボランティアサポーター「こえび隊」..... 32
8-3　企業・団体ボランティアサポーター..... 32

第９章　チケット、グッズ開発
9-1　方針..... 34
9-2　チケット..... 34
9-3　グッズ開発..... 34

第１０章　企業との関わり
10-1　方針..... 35
10-2　芸術祭への投資..... 35
10-3　パートナー制度..... 35
10-4　サポーター（再掲）..... 35
10-5　せとうち企業フォーラム..... 36

第１１章　人材確保
11-1　方針..... 37
11-2　島間交流..... 37
11-3　学校との連携..... 37
11-4　地域の人材育成..... 37

第１２章　連携
12-1　方針..... 38
12-2　県内連携事業..... 38
12-3　広域連携事業..... 38

第１３章　資金調達
13-1　資金調達..... 39
13-2　パートナー制度（再掲）..... 39
13-3　販売収入（再掲）..... 39

第１章　開催趣旨

「海の復権」

「島のお爺さん、お婆さんの笑顔を見たい」が瀬戸内国際芸術祭の初心でした。その土地で生きてきたご先祖さん以来の喜びも厳しさも含めた生活と歴史に誇りをもてる活動をしたい。それが「海の復権」というテーマでした。

地球規模で都市化、効率化、均質化が進む中で、島々の人口は減少し、地域の活力低下が顕著になる中で、格差が拡大し弱者が追いやられ、農水産業が衰退し、大量生産・大量消費・大量廃棄による地球環境の悪化は絶望的にすら思えます。これらは自然と文明のほどよい関係を保ってきた地域の生活と資産を直撃していました。

この時、美術は地球上に棲むすべての人の異なった生理のあらわれであり、自然と人間の関りをあらわす方法であったことに着目し、アーティストと地域の人々による地域の特徴の発見、交流、協働による作品をベースにした芸術祭を企画することになったのです。

異なった人々による眼差しと、修練された技術とさまざまな人たちによる共作は、多くの人達を呼び込み、ここで人は人と生活と土地を体感し、観光は地元の人たちの感幸となるのでした。

芸術祭はその過程で、この旅人と居住者、そして世界各国からのサポーターによる共通の体験を普遍的なものにするべく、反省し、試行錯誤しながら進んできました。それは地域を拓き、旅行者を目覚まし、美術を開いてきました。4 回を終えた試みと成果は次のようなものでした。

第 1 回

東の 7 つの島+高松で初の開催を迎えました。

1. 7 つの島に渡ってもらい、個性の違いを知ってもらうことにつとめ、瀬戸内の各島が持つ独特の風土や民族的背景を照らし出すことに成功したという評価をいただきました。
2. ボランティアサポーターこえび隊を媒介とし、官民協働のしくみをつくりました。制作の段階から熱意をもって参加するこえび隊が、会期中にはお客さんと作品、島との関係づくりに重要な役割を果たしました。

第 2 回

前回の会場である直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島及び高松港・宇野港周辺に、新たに沙弥島、本島、高見島、粟島、伊吹島の中西讃の 5 島を加えて開催しました。

1. 40 日間にわたり職人やパフォーマーがバングラデシュの文化と熱気を伝えた「バングラデシュ・プロジェクト」を行い、深さとリアリティをもったアジアとの文化的交流を展開することができました。
2. 男木島の休校中の小・中学校でのプロジェクトが成功し、アーティストが島へ活力を与えました。島への移住者が増え、小・中学校が再開するという奇跡的なことが起こりました。
3. 芸術祭における食の位置づけはますます重要なものになり、沙弥島での「島スープ」は地元の文化的意味と食をうまく結びつけ、新たな可能性を拓きました。

第 3 回

1. 食のフラム塾の研修を経て、各島で瀬戸内の島ならではの地元料理の提供など、食こそ地域を知り地域と関わる文化だと知りました。これにより食は飛躍的に進歩したとの評価をいただきました。
2. さらに地元独自の文化である「盆栽」「獅子舞」に焦点を当てたプロジェクトを展開しました。
3. 一層の国際化を進めるべく、第 2 回のバングラデシュに続いてタイの民族文化を披露する「タイファクトリーマーケット」、アジア 12 の国と地域のパフォーマンスが一堂に会する「APAMS2016」公演が高松で開催されました。APAMS は、平日は各島に入り、地域との密接な関わりがありました。また「瀬戸内アジアフォーラム」ではアジア 12 の国と地域から 26 団体の参加を経て、美術・文化による地域づくりの可能性について話し合われました。

第 4 回

1. 瀬戸内の特産品や農水産物等に焦点を当て、アーティストが工夫を凝らすプロジェクトを、高松港周辺（北浜 alley）を中心に展開しました。
2. 西の各島とアジアの国々を結びつけ、作品や食プロジェクトを通じて連携を強めました。また 2 回目を迎えた瀬戸内アジアフォーラムでは 15 の国と地域から 38 団体が参加し、「観光・移動」「芸術祭」について議論し交流を深めました。
3. 世界各国のキャストを迎え「大切な貨物」の公演を行いました。また台湾を中心とした数百人のアカペラ合唱団が各島で歌うなど、新しい試みを展開しました。
4. 大島の展開、評価に関して

   大島では「大切な貨物」の撮影のほか、引き続き作品を展開しました。島行きのフェリーが一般向けに解禁されるなど、大島の実態を伝え、開かれた場所づくりを進めていることへの評価を得ました。

瀬戸内国際芸術祭 2022 に向けて

第 4 回の芸術祭が始まった頃から、今までの芸術祭を根本的に総括し、次回に向けての検討を始め出しました。内容は以下のことなどです。

- 各行政区、島ごとに活動の単位を小さくする部分を設けて、より深い関わりを作りたい
- ART SETOUCHI にも共通のテーマを設け、ただイベントをやるのではなく意識的にやりたい
- 入場料、寄付、協賛以外の収入を増やしたい
- アジア全体でつながり、共通化できないか
- 食をより根底から考えたい

ここで、これまでの手法を確認します。

1. 作品をつくり、それを梃子に芸術祭を行う
2. 目的は地域の元気。つまり土地の生活、民族的なものを美術が発信し、その成立および継続のための助力で土地と人を活性化させる
3. 地元の人たちの気持ちを知り、さまざまな層とつながり交流を生み出す
4. 美術と地域をとりまく社会を学ぶ
5. 主体を形成し、次世代へとつなぐ
6. 突発的な出会いが生む思いもしない展開を点で終わらせず、さまざまな領域とつながる開口部をもつ仕組みをつくっていく

そんな中に今年 2 月からコロナ感染が始まり緊急事態宣言まで発せられ、移動、集会、共食の禁止が国内でもあり、今もその渦中にあります。社会が今後どのような方向に向かうか予断を許さない中にあり、この間つみあげてきた、インバウンドを含めたツアー型観光の再検討が必要になりました。

いずれにせよ経済第一主義から、生命、健康、人とモノの移動、クリーンエネルギー、教育文化という領域に比重が傾き、社会システムに変化が起こることに鑑みて以下のような検討を加えていくことにしました。

- 観光と移住に対し、島民が他所からの人を迎え入れられるよう腹を据えて向き合う
- 医療も社会的資本の一つとして考える。感染症だけでなく気候変動や災害を念頭に置く
- 作家が必ずしも来日しなくても開催できる展開を模索する
- これまでのお客さんの数や流れを前提とせず、ゼロベースで考える

なお、今後も、コロナウイルスと共存せざるを得ない状況の中で、さまざまな社会的変化が生じることが予想されることから、本取組方針の内容について、適宜必要な見直しを行っていきます。

第２章　開催概要

2-1　名称・会期・会場等

(1) 名称

瀬戸内国際芸術祭 2022
Setouchi Triennale 2022

(2) 会期

季節	会期	日数
春	4 月 14 日（木）～5 月 18 日（水）	35 日
夏	8 月 5 日（金）～9 月 4 日（日）	31 日
秋	9 月 29 日（木）～11 月 6 日（日）	39 日
合計日数		105 日

【会期設定について】
　会期は、過去３回と同じく、温帯地域の弧状列島である日本の大きな特徴である「四季」を海外の人々に知ってもらうため、春・夏・秋の３シーズンに分けて開催します。

(3) 会場

直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島（春会期）、本島（秋会期）、高見島（秋会期）、粟島（秋会期）、伊吹島（秋会期）、高松港周辺、宇野港周辺

(4) 主催

瀬戸内国際芸術祭実行委員会
会　　長：浜田恵造（香川県知事）
名誉会長：真鍋武紀（前香川県知事）
副 会 長：泉雅文（香川県商工会議所連合会会長）
　　：大西秀人（高松市長）
総合プロデューサー：福武總一郎（公益財団法人福武財団理事長）
総合ディレクター：北川フラム（アートディレクター）
構成団体：香川県、高松市、丸亀市、坂出市、観音寺市、三豊市、土庄町、小豆島町、直島町、多度津町、玉野市、（公財）福武財団、（公財）福武教育文化振興財団、香川県市長会、香川県町村会、四国経済産業局、四国地方整備局、四国運輸局、中国四国地方環境事務所四国事務所、国立療養所大島青松園、四国経済連合会、香川県商工会議所連合会、香川県商工会連合会、（一社）香川経済同友会、香川県農業協同組合、香川県漁業協同組合連合会、香川大学、四国学

院大学、徳島文理大学、高松大学、香川県文化協会、（公財）四国民家博物館、（公社）香川県観光協会、（一社）日本旅行業協会中四国支部香川地区委員会、（公財）高松観光コンベンション・ビューロー、香川県ホテル旅館生活衛生同業組合、四国旅客鉄道（株）、高松琴平電気鉄道（株）、香川県旅客船協会、（一社）香川県バス協会、香川県タクシー協同組合、（公財）香川県老人クラブ連合会、香川県婦人団体連絡協議会、（公社）日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会、香川県青年団体協議会、さぬき瀬戸塾／監事：（株）百十四銀行、（株）香川銀行／オブザーバー：岡山市、岡山県商工会議所連合会、岡山大学

2-2　重点的な取組みの視点

近年、グローバル化の進展により、世界全体で均質化、効率化等が進み、人間的な活動の幅が狭まってきています。

そうした中、これまでの芸術祭では、国内外のさまざまな層の人々によるフェイス・トゥ・フェイスの交流から生まれる縁を大事にしながら、自然と人間をつなぐ「アート」という方法を用いて地域の地形や歴史、コミュニティ等の文化的な独自性を明らかにしていく活動を展開し、地域を元気にするとともに、それに関わる多くの人々に希望を与えてきました。

今回の芸術祭では、こうした成果を踏まえ、これまでの取組みをさらに深めていくことを基本としつつ、新型コロナウイルス感染症への対応などの新たな課題も見据えて、次の４点を重点的な取組みの視点として掲げて準備を進めますが、今後、さまざまな社会的変化が生じることが予想されることから、適宜必要な見直しを行っていきます。

(1) 瀬戸内の里海・里山の隠れた資源の発掘と発信

前回の芸術祭では、讃岐うどんや丸亀うちわなど独自の伝統文化の中で地域に根付いてきた「瀬戸内の資源」に焦点を当てたプロジェクトを展開しました。今回は、そうした資源を育んできた瀬戸内の里海・里山に焦点を当て、地域に精通した地元市町からの提案、島民との会期外を含めた継続的なコミュニケーション、香川県立ミュージアムや瀬戸内海歴史民俗資料館が地域で進めるフィールドワークやワークショップなどを通じて、そこに潜む「深さ」や「おもしろさ」を掘り起し、世界に向けて発信します。

(2) 国内・世界とのつながりの継続、より質の高い交流への転換

前回の芸術祭では、アジアを中心とした国と地域から多くのアーティストが参加し、さまざまなプロジェクトが展開されました。今回は、新型コロナウイルス感染症を巡る国内外の動向や近年の自然災害の発生状況等を踏まえ、ＩＣＴの活用など新しいつながりの手法も見出しながら、国内外のアーティスト等との交流をより質の高いものにしていきます。コロナウイルスによる人やモノの分断を超えて人類共通の平和、楽しみ、手伝いを深めるべく一連の作業を行っていきます。また、そうした中で、地域住民とボランティアサポーターや来場者との交流、島の住民同士のより一層の交流を促進し、大学・高校や各地域団体とも協力することで、多様なつながりを継続しその内容を深めていきます。

(3) 瀬戸内の農水産物を活用した「食」の充実・強化

前回の芸術祭では、島々の「食」を魅力的な形で来場者に提供し、島の歴史や風土、地域の人々とのふれあいを味わってもらう活動を展開しました。今回は、地元の市町や学校とも連携し、本土側を含めた瀬戸内の魅力ある農水産物の掘り起しを行うことで、「食」のより一層の充実・強化を図ります。さらに、新型コロナウイルス感染症の影響により世界的に経済活動が停滞する中、地域の農水産業の振興にもつながるこうした取組みを、食料の自給について考える契機とするなど、「食」を深めていきますが、コロナ禍の中で、より一層地域に根差した食が人体に大切なことがわかってきたことに鑑み、地元食材の大切さに留意していきます。

(4) 持続可能な社会の実現に向けた取組みの推進

2015 年の国連総会で採択されたＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）では、経済・社会・環境を巡る広範な課題に統合的に取り組むための 17 のゴールが示されました。今回の芸術祭では、環境や医療、防災など地域のさまざまな課題に焦点を当てながら、アーティストが美術的な工夫を凝らして持続可能な社会の実現に向けた提案を行います。また、芸術祭の運営面においても、そうした動きに呼応して循環型の取組みを進めます。

第３章　ART　SETOUCHI 活動

3-1　方針

初開催となる 2010 年の芸術祭を終えて以降、これまで 3 年ごとに「瀬戸内国際芸術祭」を開催するとともに、芸術祭の会期以外においても、島の活力を高めていくため、作品の公開やイベントの開催、島の行事への参加など、芸術祭も含めた地域におけるアート活動全体を「ART SETOUCHI」と総称し、実践してきました。

今後も、新型コロナウイルス感染症を巡る国内外の動向等を踏まえつつ、そこにつながる作品を制作し、2022 年の芸術祭開催に向け、この「ART SETOUCHI」活動に引き続き取り組み、地域の未来を見つめた活動の充実を図っていきます。

3-2　具体的な取組み

各会場において、屋外作品は常時、屋内作品は春（ゴールデンウィーク）、夏（お盆）、秋（シルバーウィーク）の 3 シーズンに集中して公開し、あわせてオフィシャルツアーやワークショップ、イベント等も実施します。

また、ＩＣＴの活用など新しいつながりの手法も見出しながら、国内外のアーティスト等との交流を図るとともに、「島のお誕生会」の実施やこえび隊による地域行事等への参加、島間交流など、地域住民と来場者との交流や島の住民同士の交流を促進するなど、「ART SETOUCHI」活動を通じて、地域の活性化を図っていきます。

第４章　アートプロジェクト

4-1　方針

アートはその地域の特徴をあきらかにし、来客者をその土地と結びつける働きをします。と同時に、その地域とつながりをもつ国、機関、学校、企業等をつくるような機会を生んでいきます。これまでの芸術祭において蓄積されたアート作品を、会場ごとの特色を踏まえ、さらに発展させます。

なお、各会場におけるアート展開を検討するに当たっては、地域に精通した地元市町の提案等も踏まえながら、各地域の活性化に関わるさまざまな関係者を交えて議論を行うことにより、将来への展望に沿いながら方向性を確認し、できる限り地域住民等との協力関係の下に作品の制作やイベントの運営等を行います。

4-2　会場ごとの事業展開

―直島

特色・コンセプト
古くから瀬戸内海の交通の要衝として栄え、人々は漁業や製塩、海運交易に携わってきたが、20 世紀になると、銅や金などの貴金属の製錬が盛んになり、近代工業の島へと発展した。また、今では現代アートの聖地として世界に知られている。 豊かなアート施設や高い知名度により、芸術祭の会場となる島々の中で中心的役割を果たしている。
2019 までの取組み
初回の芸術祭にあわせて、直島銭湯「I ❤湯（2009～)」、李禹煥美術館（2010～）が整備された。そして次の回には ANDO MUSEUM（2013～）や宮浦ギャラリー六区（2013～）が誕生。また、2016 年の芸術祭に先駆けて直島ホール（2015～）が完成するなどアート、建築の充実が図られている。2019 年には、旧家を舞台に、水を介した交流を目指す「The Naoshima Plan 2019「水」(2019～)」のほか、島内で子供たちと稽古をしながら演劇を作り上げる「僕らが生まれる 7 日間の舟歌（バルカロール)」などのイベントを実施した。また、全国でも珍しい女性だけで演じる直島女文楽の公演を毎回の芸術祭で行うなど、固有の文化の発信も行ってきた。
今後の展開方針
＜美術による体験や学習の充実＞ これまでに蓄積されてきた豊かなアート施設を活かしつつ、特にアーティストの参加による学校での美術体験に力を入れていく。また、島民参加型のイベント・ワークショップに力をいれる。また、ヴァレーギャラリー、ギャラリー六区の展開に力を入れる。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 直島パヴィリオン	 直島ホール	 家プロジェクト	 The Naoshima Plan「水」	 赤かぼちゃ
 地中美術館	 直島銭湯「I❤湯」			

―豊島

特色・コンセプト
古来より稲作をはじめとした農業や酪農、漁業が盛んな豊かな島であり、また、かつては、「豊島千軒、石工千人」と言われるほど石材業が盛んであった。2017 年 6 月、全国的な注目を集めた不法投棄による産業廃棄物の処理が完了し、一つの区切りの時期を迎えている。 離島でありながら、かつては米を島外に出すほどの収穫があった肥沃な土地と地形を持つこの島の特性を活かし、「食」と「アート」を掛け合わせることによって、「自給自足」「地産地消」の新しい地域社会のあり方を発信することを目指して、芸術祭での活動を始めており、美しい棚田の一角に建設された豊島美術館を軸に、家浦、唐櫃、甲生の 3 つの集落などで作品を展開している。
2019 までの取組み
食とアートで人々をつなぐプラットホームとして 2010 年に島キッチンを整備し、同じ年に、地元住民が再生した棚田の景観の中に水滴をモチーフにした「豊島美術館」や「心臓音のアーカイブ」が誕生した。その後も、生と死などをテーマに、「豊島横尾館（2013～）」や「ささやきの森（2016～）」などの作品も加わった。また、2019 年には、かつて乳児院だった敷地内に仮設公園を開園する「コロガル公園 in 豊島©山口情報芸術センター」の設置や、作家と島民、来場者が協力して大凧を揚げる「空を曳く」などのイベントを実施した。また、島キッチンでは芸術祭会期外も毎月、「島のお誕生会」が開かれ、住民と来場者の交流が生まれている。
今後の展開方針
＜アートと農業との結合＞ アートと農業の関わり方をベースにした活動方針をたて、既存施設の回遊が行われるようにするほか、作品制作などを通じて、作家と島民、訪問者の協働を図っていく。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 豊島横尾館	 針工場	 空の粒子／唐櫃	 島キッチン	 勝者はいないーマルチ・バスケットボール
 豊島美術館	 心臓音のアーカイブ			

ー女木島

特色・コンセプト
島の山頂近くに大きな洞窟があり、それが「鬼ヶ島伝説」の鬼の洞窟と言われ、鬼ヶ島として知られるようになった。島の風景を特徴づけるのが「オオテ」と呼ばれる高い石垣で、冬場の強風から家屋を守っている。 島そのものの美しさを活かし、島の生活を体感できるよう、海・波・風・樹・光等をテーマにした、五感を通して島の自然を体感させる作品や、休校中の小学校や空家など、既存の施設を活かした作品を展開している。
2019 までの取組み
目に見えない風の形を視覚化した「カモメの駐車場（2010～)」や幻想的な光を反射する「均衡（2010～2016)」、休校中の小学校を大胆に活用した「女根／めこん（2013～)」、古い映画館をモチーフにした「ISLAND THEATRE MEGI「女木島名画座」（2016～）」、地域住民が描かれた「西浦の塔（OK タワー）（2016）」、盆栽に光を当てた「feel feel BONSAI（2016）」といった作品を展開してきた。 2019 年には、島に暮らす人たちにとって便利で、芸術祭を訪れた人々にとっても魅力があるアート作品「島の中の小さなお店」プロジェクトが人気を博した。また、4 つの作品で食の提供を行った。中でも「瀬戸内ガストロノミー」は、女木島の歴史や香川県の名産品を知ることができるとともに瀬戸内のおいしいものを食べる特別な時間が過ごせると好評だった。
今後の展開方針
＜島全体の一体的作品展開＞ 島全体として、鬼ヶ島という伝説と島の施設全体がアイデンティティをもって連動する作品展開を行っていく。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 カモメの駐車場	 20 世紀の回想	 ヘアサロン壽	 ランドリー	 ピンポン・シー
 不在の存在	 女根/めこん	 ISLAND THEATRE MEGI「女木島名画座」	 オニノコ瓦プロジェクト2	

―男木島

特色・コンセプト
昔からこの島では、男性は海へ漁に行き、あとに残る女性が畑の担い手であった。また、どの家でも耕作牛を飼っており、農繁期には高松などの農家にその牛を貸す、借耕牛の習慣が昭和 30 年代ごろまで続いていた。 島に連綿と続く漁村の生活に触れ、その息づきを体感できるよう、男木島独特の斜面に形成された集落を回遊し、石垣の路地などを利用して、島独自の空間を体験できる作品や、漁村の生活に触れることができるよう民家の土間などを利用した作品の展開を行っている。
2019 までの取組み
島を訪れた人を出迎える男木交流館の「男木島の魂（2010～）」を基点に、細い路地のところどころに点在する「男木島 路地壁画プロジェクト wallalley（2010～）」、海や空に溶け込むような青と白の立体作品「歩く方舟（2013～）」、古民家で織り成す影絵とサウンドオブジェ「アキノリウム（2016～）」、男木島に育つ植物をモチーフにした「生成するウォールドローイング -日本家屋のために（2019～）」、タコ壺をモチーフにした遊具「タコツボル（2019～）」、2010 年から毎回展示替えや作品を追加している川島猛とドリームフレンズの「The Space Flower・Dance・Ring（宇宙華・舞・環）（2019～）」などの作品を展開した。2013 年の昭和 40 年会の活動がひとつの引き金となり、一度は休校した小中学校が 2014 年に再開、移住者が島に活気を与え、島の未来への希望が生まれている。
今後の展開方針
＜地域の変化への連動＞ 移住者を交えた島民が芸術祭活動と連動しつつも、理想的な共同体をつくっていくための方策にアートが伴走していくようにする。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 男木島の魂	 タコツボル	 生成するウォールドローイング-日本家屋のために	 男木島　路地壁画プロジェクト　wallalley	 The Space Flower・Dance・Ring（宇宙華・舞・環）
 アキノリウム	 歩く方舟			

―小豆島

特色・コンセプト
古くは「あずきしま」と呼ばれ、「古事記」にも登場する小豆島は、日本で初めてオリーブの栽培に成功して以来、栽培が盛んになり、「オリーブの島」として親しまれてきた。寒霞渓、エンジェルロードに代表されるような観光地としても有名であり、歴史と自然が調和した島である。 芸術祭では、土庄港周辺、肥土山・中山地区、三都半島、醤の郷、坂手地区、福田地区などを小豆島の軸とし、それぞれ特徴的なアートプロジェクトを展開してきた。また、「福武ハウス」を中心にアジアにおける地域文化のコミュニティを通した交流を行っている。
2019 までの取組み
小豆島では、島の各エリアで、歴史や文化、地場産業などそれぞれの地域の特色を生かしたアート展開を行ってきた。 島の玄関口となる各港では、「太陽の贈り物（2013～土庄港）」や「再び …（2019、土庄港）」、「辿り着く向こう岸-シャン・ヤンの航海企画展（2019、草壁港）」、「スター・アンガー（2013～坂手港）」といったランドマークとなる作品を制作してきた。三都半島では、地域住民と広島市立大学芸術学部との連携事業が営まれ、アートプロジェクトが継続的に展開されて、地域住民の積極的な関わりが定着してきた。2019 年には作品設置場所を神浦地区に集約したことで周遊性が高まった。大部地区では、台湾の作家と地域住民が協働し、「国境を越えて・潮（2016、大部）」や「国境を越えて・波（2019、大部）」を制作した。小豆島からおよそ 170 メートル離れた四海地域の沖之島では、独特な地理環境に溶け込む「OKINOSANG/元気・覇気・卦気（2019、四海・沖之島）」が制作され、鑑賞者が渡船で向かう形態も注目を集めた。山間地域である肥土山・中山地区では、2010 年から 4 回連続して同じ場所で竹を用いた作品を作っている作家が地元の人と協力して制作した「小豆島の恋（2019、中山）」などの景観に溶け込む作品や、地域の歴史を組み込み香川大学が中心となって行った演劇イベントが注目を集め、賑わいを見せた。醤の郷地区では、醤油やオリーブなどの地場産業を活かした作品を展開し、「静寂の部屋（2019、醤の郷）」は、かつて醤油組合事務所であった建物で展示を行った。 また、各所で島民によるおもてなしが行われ、来場者と島民の交流のきっかけになった。
今後の展開方針
＜地域づくりを促進するアート活動＞ 小豆島では初回の芸術祭の中山・肥土山地区から始まり、以降、各港を中心として作品展開を行ってきた。この動きをベースに土庄町、小豆島町それぞれの地域振興方針に関わるように作品展開を進めていく。福武ハウスを中心に各島と協力して、アジア諸地域をつないでいく。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

太陽の贈り物	再び …	アートノショーターミナル	猪鹿垣の島	福武ハウス

自然の目「大地から」	オリーブのリーゼント	石の島の石	スター・アンガー	漁師の家

―大島

特色・コンセプト
白砂青松の美しい島の風景が残る大島。1909 年にハンセン病の療養所である大島青松園が設立され、1996 年に「らい予防法」が廃止されるまでの約 90 年間、国によるハンセン病患者の隔離政策が行われてきた。現在は、往来が自由になり、入所者全員がハンセン病の基本治療を終え、日常生活の支援と、ハンセン病を正しく理解するための活動が行われている。 2019 年の芸術祭の開幕に合わせて官有船が一般旅客定期航路化され、入所者が長年希望していた社会交流会館がオープンした。 また、芸術祭を契機に高松市は大島振興方策を策定し、子どものためのサマーキャンプやラジオ番組「大島アワー」など入所者の意思に伴走する活動が行われている。
2019 までの取組み
他の島とは異なる環境であることから、作品の制作プロセスや公開方法・展示場所などは、プロジェクトの活動プロセスの中で検討し、住民と来島者との関わりの中で、美術を通して入所者が生きてきた記録・記憶を伝え、地域と人の豊かな環境を構築するための活動を展開してきた。 入所者との交流を深め、島の内外のつながりを紡ぎ出す「やさしい美術プロジェクト」や地域と人の豊かな環境を整備してきた田島征三の活動を中心に、こえび隊の会期外も含めたガイドの実施など丁寧な活動を続けている。 2019 年には、1 人の入所者のこれまでの人生をモチーフにした「『N さんの人生・大島七十年』－木製便器の部屋－」や、入所者や看護師らから聞き取った物語りを手芸にて作品化した「物語るテーブルランナー in 大島青松園（2019～)」、「海峡の歌/Strait Songs（2019～)」や「大切な貨物（2019～)」などの作品を展開した。
今後の展開方針
＜将来のあり方を見据えた展開＞ 住民、大島青松園、高松市、香川県と連携しながら、今までの活動を維持しつつ、将来の島のあり方を見据えた活動を行う。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 青空水族館	 「N さんの人生・大島七十年」－木製便器の部屋－	 稀有の触手	 {つながりの家} GALLERY15「海のこだま」	 海峡の歌/Strait Songs
 物語るテーブルランナー in 大島青松園	 {つながりの家}カフェ・シヨル	 大切な貨物		

―犬島

特色・コンセプト
1909 年に銅製錬所が開設され、島の人口は、一時期 5,000 人を超えたが、1919 年の製錬所の閉鎖などにより、人口は減少の一途を辿った。 経済産業省による「近代化産業遺産群」の一つとして、製錬所跡地が認定された。この製錬所の遺構を保存し、環境に負荷を与えない施設として再生するなど、犬島全体を「建築・現代アート・環境」による新たな循環型社会のモデルとすることを目指したプロジェクトを展開している。また、犬島独自の空間と歴史を活かした演劇なども開催している。
2019 までの取組み
2008 年に近代化産業遺産である犬島製錬所の遺構を保存・再生した「犬島精錬所美術館」が開館し、2010 年には犬島の集落に犬島「家プロジェクト」を開始。会期毎に一部の作品を入れ替えながら展開してきた。2016 年には、「円都空間 in 犬島　produced by Takeshi Kobayashi（2016)」、2019 年には、「エントロピーの楽園-第 2 章-」といったパフォーミングアーツを開催。また、「犬島 くらしの植物園」を開園し、食べ物からエネルギーに至るまで、自給自足をしながら自然とともにくらす歓びを体験できる場づくりを実施してきた。
今後の展開方針
＜次世代のための循環型・持続可能な社会のモデルをつくる＞ 犬島の歴史・文化・資源・人をより体感できる取組みを具現化し、「滞在」を通して島民と来島者がともに次世代の循環型・持続可能な「くらし方」「生き方」を一緒に考えていけるような機会と空間を提供する。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 犬島「家プロジェクト」	 犬島 くらしの植物園	 犬島精錬所美術館

―沙弥島

特色・コンセプト
かつて柿本人麻呂がこの島を訪れ、そこで詠んだ歌は万葉集に収められている。番の州工業地帯の大規模な埋め立て造成によって、1960 年代後半に東隣の瀬居島とともに陸続きになった。現在は、瀬戸大橋記念公園が整備され、夏場は「快水浴場百選」（環境省）に選ばれた沙弥海水浴場が多くの海水浴客でにぎわっている。 沙弥島をはじめ、与島地区 5 島や坂出市の特徴をとらえ、地域の歴史や文化を活かした活動が行われている。
2019 までの取組み
2013 年から会場に加わり、2019 年で 3 回目の春会期を迎えた。沙弥島の新たなスポットとして親しまれている小高い丘の作品「階層・地層・層（2013～）」や、沙弥島、瀬居島、与島、岩黒島、櫃石島の 5 つの島に暮らす人々が協働して制作した巨大でカラフルな作品「そらあみ＜島巡り＞（2013、2016、2019）」、「沙弥島・西ノ浜の家（2013、2016）」での与島地区 5 島の郷土料理の提供等を展開、「八人九脚（2013～）」は瀬戸大橋記念公園で、瀬戸内海を望むスポットとして継続展示されている。また、2019 年には、旧沙弥小・中学校において新たに 4 つの作品を展開した。瀬戸大橋を一望できるナカンダ浜の絶景ポイントでは、「家船」から着想を得た船の作品が展開され、春会期以降も秋会期終了まで継続して制作が進められた。このように、島の歴史や現状を魅力的に伝える作品を、ワークショップなど地域の住民との共同作業を通して展開してきた。
今後の展開方針
＜与島地区 5 島のつながりを深める＞ 従来の展開を受け継ぎつつ、与島地区 5 島の連携を図る作品展開を考えていく。また、地域の伝統行事も活かしながら、春会期にふさわしい作品、イベントを計画する。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 階層・地層・層	 八人九脚

一本島

特色・コンセプト
優れた造船及び操船技術を持った塩飽水軍の本拠地として栄える。船方たちは人名（にんみょう）と称され、いたる所に統治の歴史的遺産が残っている。日本人の手で初めて太平洋を往復した咸臨丸の乗組員の多くは塩飽の水夫であった。また、人名の一部は、造船技術を活かし、宮大工や家大工として「塩飽大工」の名を世に知らしめた。 塩飽勤番所跡、千歳座、笠島まち並保存地区など、島に存在する歴史ある地域資産を保存し、活かす活動を行っている。
2019 までの取組み
2013 年から会場に加わり、2019 年で 3 回目の秋会期を迎えた。塩飽大工衆の復活を願い活動を開始させた「善根湯×版築プロジェクト（2013～）」や、瀬戸内の美しさをヨーロッパに伝えたシーボルトをモチーフにした作品「シーボルトガーデン（2013～2019）」、海辺に和船を思わせる立体作品を設置した「水の下の空（2016～）」のほか、本島の石を使って惑星の軌道をイメージした「ワールドラインズ（2019～）」、塩飽大工の建てた建物の中で柱や梁、畳や建具のもつ均整を利用した「レボリューション（2019～）」など、島にちなんだ作品を展開してきた。また、重要伝統的建造物群保存地区の笠島集落を作品展開の基点とし、島の歴史ある地域資産を作品と共に紹介した。2019 では、タイのアーティストの食のワークショップに島内の飲食店が参加して、会期中にタイのメニューを提供し、毎日曜日は港でマルシェを展開した。
今後の展開方針
＜島の歴史に焦点を当てる＞ 塩飽水軍の本拠地として栄えた本島独特の歴史や、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている笠島まち並み保存地区の特徴を生かした作品の制作に努める。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 Vertrek「出航」	 漆喰・鏝絵かんばんプロジェクト	 善根湯×版築プロジェクト	 咸臨の家	 水の下の空
 産屋から、殯屋から	 レボリューション／ワールドラインズ			

―高見島

特色・コンセプト
かつては蚊取り線香の原料である除虫菊の栽培が盛んで、真っ白な花が島を覆い尽くすほどであった。最盛期には 1,000 人を超えた人口も、殺虫剤の普及により除虫菊の生産が途絶えたことや、高度経済成長期時の関西への流出等を経て、今では極端に少ない。約 25 度の急傾斜地に家が建ち並び、縫うように小路が伸びる独特の古い町並みと自然石の乱れ積み石垣が残る集落で、空き家を活用した作品展開を行ってきた。また、地域住民が中心となって地域独特の食文化である「茶がゆ」を振る舞うなど、来場者へのお接待も行われてきた。
2019 までの取組み
2013 年から会場に加わり、2019 年で 3 回目の秋会期を迎えた。高見島におけるアートプロジェクトは、2013 年の当初より活動を継続している京都精華大学チームが中心となり展開している。 「除虫菊の家（2013～）」、古民家の壁に突き刺さったアクリル板を通じて光が室内へと射し込む「時のふる家（2016～）」、かつてそこで暮らしていた人々の生活や記憶を紡いだ「まなうらの景色（2019～）」など、島に残された伝統的な古民家や人々の暮らし、かつて栽培が盛んであった除虫菊などを題材にした作品を展開してきた。 2013 年、2016 年では高台に建つ家で展開された「海のテラス（2013～）」も、今回はより臨場感を味わえるよう、浦地区独特の石造りの集落の中に移転し、海に向かって突き出すようにテラスを設置。オフィシャルツアー客にもランチを提供した。
今後の展開方針
＜若い世代を巻き込んだ会場作り＞ 高見島をまるごと美術館に見立てる京都精華大学のプロジェクトを中心に引き続きアートを展開していくほか、島外の若い世代による芸術祭への参加を促していく。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 除虫菊の家	 うつりかわりの家	 時のふる家	 海のテラス	 まなうらの景色
 過日の同居				

―粟島

特色・コンセプト
戦国時代は塩飽水軍の拠点となり、江戸時代から明治初期まで北前船の寄港地として栄えた。その後、1897 年に日本で最初の国立海員学校が設立され、多くの船乗りを輩出したが、海運業の衰退で 1987 年に閉鎖された。その跡地に、粟島海洋記念公園として整備された「粟島海洋記念館」は、島のシンボルとなっており、90 年間の歴史と誇りが今も色濃く残っている。 2010 年から続く日比野克彦の「瀬戸内海底探査船美術館プロジェクト」を基軸に、瀬戸内海の歴史や環境を学び、その魅力を感じさせるアートプロジェクトを展開している。
2019 までの取組み
2013 年から会場に加わり、2019 年で 3 回目の秋会期を迎えた。海底から引き揚げた品々を展示する「一昨日丸」や「ソコソコ想像所」などの「瀬戸内海底探査船美術館プロジェクト（2010～）」を基軸に作品を展開している。また、使われなくなった郵便局を一部改装し、「漂流私書箱」を設置した「漂流郵便局（2013～2016）」が全国的な話題を集めた。2016 年には旧幼稚園や島の廃校を使用した「思考の輪郭（2016～）」、「過ぎ去った子供達の歌（2016～）」などのインスターレーションを展開した。また、粟島芸術家村では、「粟島アーティスト・イン・レジデンス」作家等の作品展示を行った。 2019 年には、種は「人やもの、地域をつなぐ“船”のよう」という発想で造船された「TANeFUNe」で粟島の海岸線を調査する《種は船プロジェクト》や、世界の海洋環境を調査してきた「TARA」による活動記録やタラ号乗船アーティストの作品展示を行った。また、瀬戸内海で育った少女たち、かつての少女たちが「粟島海員学校物語」を上演した瀬戸内少女歌劇団のイベントも行った。
今後の展開方針
＜海洋記念館を基点とした作品の広がり＞ 拠点施設である粟島海洋記念館の改修工事が行われるが、島のシンボルである記念館の文化と歴史と、芸術祭が関わりを持つように作品を展開していく。記念館を基点とし、作品の広がりが島全体にもたらされることを重視する。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

 瀬戸内海底探査船美術館プロジェクト	 須田港待合所プロジェクト	 思考の輪郭	 過ぎ去った子供達の歌

―伊吹島

特色・コンセプト
瀬戸内海の中央部、燧灘(ひうちなだ)に浮かぶ伊吹島は、讃岐うどんのダシに欠かせない良質な煮干し（イリコ）の生産が盛んで、伊吹島沖で獲れたものは「伊吹いりこ」のブランドで出荷されている。また、独特の趣を湛え、日本で唯一、平安時代の京言葉のアクセントを残す島でもある。 島の活気ある漁撈文化を活かすとともに、島に点在する独特の歴史資産を明らかにする活動を展開している。
2019 までの取組み
2013 年から会場に加わり、2013 は夏、2016 は秋会期に参加。廃校の校庭に設置した「トイレの家（2013～）」、漁網や浮きなどの漁道具や生活用品を素材に島の人たちや小中学生らとともに作った「沈まぬ船（2013～2016）」、みかんぐみ＋明治大学学生が島独特の材料を使用して建立した「イリコ庵（2016～）」、島の素材を使い、瀬戸内の風を感じさせる作品「Here,There,Everywhere:Project Another Country-Dap-Pay-（2016）」など、イワシ漁や島の暮らし、風俗に根ざした作品を展開した。 2019 年には、生命誕生の場である「出部屋」の跡地に、栗林隆による作品「伊吹の樹」を展開した。また、島は膜であり、生命は海の縁どりを行来し生まれ続けるというテーマのもと行ったパフォーマンス「島膜_Ibuki」も好評であった。島のお母さんら有志は、手づくりの島の味「うららの伊吹島弁当」で来島者をもてなした。
今後の展開方針
＜鑑賞者の回遊を促す＞ 島内の各地域に歴史的な独特の文化があることから、それら地域の個性と作品とが結びつくように作品展開を進めていく。

主な既存作品・継続展開プロジェクト

トイレの家	イリコ庵	伊吹の樹	パサングー ふたつのものすべての中に

―高松港周辺

特色・コンセプト
島への玄関口、海との出合いの場でもある高松港は、芸術祭が始まって以来、ヒト・モノ・コトが集まるマザーポートとしての役割を担ってきた。 人を送り出すだけではなく、交流拠点ともなるよう、アートやイベントを展開してきたほか、「産物」や「食」が集まるマーケットを設置し、芸術祭の来訪者に食の楽しみなども提供してきた。また、宿泊拠点ともなる高松港では、夜の港や街を楽しむプログラムや、来訪者を迎え入れる船の出入りの演出など、にぎわいとおもてなしのプログラムも展開してきた。
2019 までの取組み
高松港に立つ、高さ 8mのカラフルな 2 本の柱「Liminal Air -core-（2010～)」などのシンボリックな作品が設置されている。また、2010 年、2013 年には「高松うみあかりプロジェクト」で多くの市民が協働し、2016 年に続き 2019 年においても、地域ごとに独自性を有する獅子舞によるイベントを開催。家族連れで大いに賑わった。その他、アジアとのつながりを深める取組みとして「ベンガル島（2013)」、「瀬戸内アジア村（2016)」を展開したほか、栗林公園では、瀬戸内の風土や歴史文化などに根ざしたパフォーマンスと地元食材を使った料理を振る舞う「讃岐の晩餐会（2016)」を行った。 2019 年には、新たな取組みとして、島から帰ってきた人たちが夜間も作品を鑑賞できるよう、北浜アリーで「うちわの骨の広場」、「LEFTOVERS」などを展開したほか、四国村などの既存施設を活用した作品・イベントも展開した。
今後の展開方針
＜高松港周辺エリアを拡充させる＞ 高松港を拠点とし、作品やイベントの展開場所として香川県立ミュージアムや四国村などの既存施設を引き続き活用していくほか、高松市が屋島山上に設置予定の拠点施設や五色台の瀬戸内海歴史民俗資料館などと連携した取組みを進めていく。

主な既存作品・継続プロジェクト

 Liminal Air –core-	 I’m here. ここにいるよ。	 待つ人/内海さん	 銀行家、看護師、探偵、弁護士	 Watch Tower
 ウェルカム/ファニーブルー				

―宇野港周辺

特色・コンセプト
1909 年に本州と四国を結ぶ鉄道連絡船の港湾として整備され、翌年には宇野線が開通し、同時に宇高連絡船が就航した。1988 年の瀬戸大橋完成に伴って宇高連絡船が廃止されたが、民間航路のフェリーターミナルとしての整備が進められた。 本州側から瀬戸内の島々への玄関口として情報が集まる拠点を目指し、人が集まるプラットホームを設置。アートトリップへの出発を盛り上げる始まりの場所となっている。
2019 までの取組み
宇野港のシンボルとして家庭の不要品を集めて作った「宇野のチヌ（2010～）」を設置し、2016 年にはコチヌも生まれた。宇野港「連絡船の町」プロジェクト（2010～2019）では、毎年、船や港にまつわるフォトコンテストを行い、街中での写真展示を行ってきた。「舟底の記憶（2013～）」や「海の記憶（2016～）」、「IN TRANSITION / IN PROGRESS（2019）」といった港を想起させる作品や宇野みなと線 4 駅をアート化した「JR 宇野みなと線アートプロジェクト（2016～）」、「終点の先へ（2016～）」など、本州側の玄関口である宇野駅・宇野港らしさを生かした作品のほか、瀬戸内の島々と造船所、自然と人工の風景が混在している場所から見えてくるものを表現した「斜めの構成 1 / 斜めの構成 2 / 水平の構成 3（2019）」といった地域の歴史や文化に基づいた作品を展開した。 また、地元のおいしいものと瀬戸内の幸をふんだんに詰め込み、おかずもお弁当箱も全て玉野の「玉」からイメージして丸い形状にした「たまのの“たまべん”」を食の取組みとして展開した。
今後の展開方針
＜滞留拠点を目指した取組み＞ 本州側の玄関口としての役割を担ってきた宇野港に、島から帰ってきた人たちが長く留まってもらえるような仕組みを整えることで、単なる通過点ではなく、滞留拠点としての役割も担えるよう検討していく。 また、地元学生が外国人観光客と交流するなど、宇野港を教育フィールドとして活用する「たまのスチューデントガイドプログラム」や、「食プロジェクト」などを行い、地元住民による芸術祭への関わりをより一層深める。

主な既存作品・継続プロジェクト

宇野のチヌ	終点の先へ	舟底の記憶	JR 宇野みなと線 アートプロジェクト	海の記憶

4-3　アーティスト選考

アーティストの選考は、作品設置場所等の諸条件、地域の素材や住民との関わりなどを考慮し、招待又は公募によって行います。選考に当たっては、作家の能力や実績、活動等についてできるだけ幅広い情報を収集し、円滑かつ効果的に選考を行うための体制を整えます。

招待：サイトスペシフィック＊な作品制作や、コミュニケーションをテーマとする作品展開などに定評・実績のあるアーティスト、並びに新進気鋭のアーティストを国内外から招待します。

公募：島々の魅力を発見し、地域資源を活かしたアートプロジェクトを広く国内外から公募します。新しい才能の発掘・育成の場とするとともに、事前広報の場としても活用します。

＊サイトスペシフィック

特定の場所に帰属する性質を示し、美術作品の場合は、場所を活かした表現により制作された作品を指す。

第５章　受入環境の整備

5-1　方針

5-1-1　基本方針

芸術祭の会場の多くは離島です。船に乗って島に渡り、作品にたどり着くまでのプロセス、決して便利とは言えない島の暮らしを体験することそのものがこの芸術祭の魅力であり、特徴ですが、一方でフェリーなどの海上交通の便数や島内の移動手段、島内の宿泊や食事場所には限りがあることから、会期中にはそれらの充実も欠かせません。

島の体験そのものと利便性のバランスを見極めながら、海上交通及び島内交通に関する対策を講じ、来場者の交通手段の確保に努めるほか、高松港・宇野港周辺も含めた宿泊などの受入態勢の充実に努めます。

5-1-2　取組みの概要

船やバスなどの交通事業者や地元市町等との連携を図り、会期中の新規航路の開設や既存航路の増便などを検討するとともに、規模の大きな島では、バス路線の充実について検討します。

また、会期中、十分な数の来場者に対応できるよう、各会場における宿泊などの受入環境について、可能な対応を検討します。

5-2　海上交通

5-2-1　会期中の航路拡充等

会場となる島々を結ぶ交通アクセスの向上を図るため、新規航路（臨時航路）の開設や既存航路の増便、臨時便の確保に向け運航事業者と調整します。

5-2-2　共通乗船券

来場者の利便性向上や乗船窓口付近での混雑緩和を図るため、フェリー共通乗船券の導入について検討します。

5-3　島内交通

直島、豊島、女木島、小豆島、本島においては、地元市町等と連携しながら、既存バス路線のダイヤの増便等を行います。また、ルートやダイヤの見直しが必要と考えられる路線について、関係者と調整します。

5-4　本土側のアクセス

空港や駅から港までの交通アクセスを充実させるため、シャトルバスの運行や臨時駐車場の開設について地元市町等と調整します。

5-5　混雑対策

会期中の祝日や週休日の状況等をもとに、混雑日、受入に余裕のある日をあらかじめ来場者が把握し、来場する際の参考にできるよう混雑予想カレンダーを作成します。

また、関係観光協会やホテル旅館等宿泊事業者の団体と連携し、公式ウェブサイト等で来場者に対して宿泊情報を提供します。

5-6　芸術祭鑑賞ツアー

広範囲に点在する数多くの作品を楽しむためには、船やバスのコースをうまく組み立てる必要がありますが、慣れない来場者には、難しさもあります。そのような来場者のニーズに応えるため、各会場の作品を効率よく鑑賞でき、島巡りを存分に味わうことができる芸術祭鑑賞ツアーを実施します。

ＮＰＯ法人瀬戸内こえびネットワークやツアー会社などと連携して、アート作品や島の歴史・文化などについて案内するガイド付きツアーを実施することで、より深く芸術祭と島々を知る機会を提供します。

5-7　警護・救急体制の整備

会場となる各島や本土側の港において、芸術祭開催時の混雑対応・安全確保のため必要な場所には、警備員を配置して対応ができるようにします。

緊急時に迅速かつ的確な対応ができるよう、事故・災害の種別ごとの具体的な運用方法を記載した会場別マニュアルを整備します。

会場で傷病者が発生した場合は、消防局・本部等との連携のもと、各島の診療所等への協力を要請します。なお、緊急時には防災ヘリや救急艇を活用できるよう関係機関との調整を行います。

第６章　広報

6-1　方針

6-1-1　基本方針

芸術祭は、テーマである「海の復権」の実現に向けて、現代アートを媒介に、地域の活性化や再生活動につながることを目的としています。

そのためには、アーティストと地域住民、ボランティアサポーターなどによる協働のほか、国や世代、ジャンルを超えた幅広い層のつながりが不可欠となることから、そうした多様な層を含めた広範囲にわたる情報発信を行っていきます。

同時に、芸術祭を支える仕組みや、地域の自然、文化、歴史、民俗、生活などを包括的に伝えることにより、芸術祭の開催意義を広く伝えていきます。

6-1-2　取組みの概要

企画発表会、地元説明会や島々での関連イベントなどを通じたＰＲ活動を行っていくとともに、ポスター・リーフレットや公式ウェブサイトなど、さまざまな広報ツールにより芸術祭に関する情報をタイムリーに提供します。また、これまで重視してきたパブリシティの活用に加え、よりダイレクトに情報を伝えることができるＳＮＳの活用に力を注いでいきます。

6-2　情報発信活動

6-2-1　ビジュアル展開

日本を代表するグラフィックデザイナーの原研哉が、これまでの芸術祭のブランドイメージを引き継ぎ、芸術祭 2022 の広報デザイン全般を手掛けます。そして、それをもとに、芸術祭のイメージを広く伝えていきます。

6-2-2　メディア向け広報

芸術祭の認知度を高めるとともに、芸術祭の開催意義を的確に伝え、ブランドイメージの向上やブランド力の強化を図るため、美術系や旅行系のメディアにとどまらず、社会系のメディアなど、幅広い分野のメディアを対象に情報発信を行います。

また、国内外に向けた積極的な情報発信を展開するため、東京などにおいて企画発表会を開催し、取材誘致に取り組みます。

6-2-3　一般向け広報

ポスターやリーフレット、公式ウェブサイト、SNS など多様な媒体を活用した情報発信を行うほか、各種広報誌への掲載などにより芸術祭への来場を促します。

また、島々での芸術祭関連イベント等を通じて、芸術祭 2022 の告知とより一層のサポーターの獲得を図ります。

6-2-4　旅行エージェント向け広報

関係自治体や関係団体が実施するプロモーション活動と連携し、東京などの主要都市で、旅行エージェントを対象にした説明会や商談会において芸術祭の魅力を伝えるほか、作品鑑賞や島巡りを楽しめる情報を提供することにより、旅行商品の造成を促します。

6-2-5　海外向け広報

海外のメディアに適切な情報提供を行い、広く発信してもらうことで、できるだけ多くの方々に正確な情報が届けられるような仕掛けを講じていきます。

また、国や世代、ジャンルを超えた幅広い層との交流が図られるよう、公式ウェブサイトや SNS を活用した情報発信を行います。

6-3　広報ツール

6-3-1　公式ウェブサイト

芸術祭の価値や魅力について、国内外における認知度をより高めるため、公式ウェブサイトにおいて芸術祭に関するさまざまな情報を集約して発信するとともに、公式ウェブサイトの内容の充実を図ります。

また、現行の 5 ヵ国語（日本語・英語・中国語（簡体字・繁体字）・韓国語）による多言語化を引き続き行います。

6-3-2　公式 SNS

情報の伝達や拡散などに有効であるフェイスブックやツイッター、インスタグラムなどの SNS を活用し、瀬戸内の最新情報や作品制作状況などをタイムリーに発信することにより、利用者が芸術祭をより身近に感じ、来場意欲を高められるよう取り組みます。

6-3-3　ポスター、リーフレット

芸術祭 2022 のポスターとリーフレットを作成し、首都圏や関西圏、中四国などで配布・掲出します。また、空港、駅、港などの交通拠点をはじめ、旅行会社、全国の美術館やギャラリーなどの文化施設、美術・建築系大学などの教育施設、連携するアートイベントなどへ効果的に配布・掲出することで、芸術祭のイメージを広く発信します。

第７章　来場者への情報提供

7-1　方針

7-1-1　基本方針

船で島に渡り、多くの人にとっての日常から離れた場所を巡っていくことが芸術祭の醍醐味のひとつですが、船旅・島旅に馴染みのない来場者にとっては、知識や情報、経験の少なさから、心理的な不安を感じる面もあります。そのため、来場者のニーズに応じた十分な情報を、来場者が事前に計画を立てる段階や、実際に現地を訪れてからなど、時期に応じて適切に提供できる体制を整え、スムーズに島々や作品を巡ることができるようにします。

7-1-2　取組みの概要

インターネットやガイドブックを通じて、芸術祭を巡るために必要な情報を来場者が事前に入手できるようにするほか、現地を訪れた来場者には、モバイルアプリなどにより巡り方や作品の開館状況、イベントなどの情報提供を行えるように検討します。

また、会場となる島々や高松港、宇野港等には案内所を設置するなど、情報の提供や問い合わせへの対応が行える環境を整備します。

なお、これらの検討の際には、外国語対応についても考慮します。

7-2　公式ウェブサイト

公式ウェブサイトに、芸術祭に関する情報を集約し、来場者が得たい情報を５ヵ国語（日本語、英語、中国語（簡体字・繁体字）、韓国語）で、総合的に発信します。また、モバイル用アプリなどと連携し、来場者が島を訪れた際に必要な情報を発信します。

7-3　モバイル用アプリ

iOS とアンドロイド OS に対応した公式アプリを開発し、会場を巡る来場者に最新の情報を提供します。

混雑情報や交通状況など緊急性の高い情報をリアルタイムで提供し、スムーズに作品鑑賞ができるようにするほか、多言語に対応し、海外からの来場者に対しても、リアルタイムに情報を届けます。

7-4　紙媒体

ガイドブックや島マップなどの紙媒体により、芸術祭のアート作品の情報や交通アクセスなどの情報を掲載し、来場者が島を訪れた際の道案内になるよう情報提供を行います。

7-5　案内所の設置

芸術祭のマザーポートとなる高松港に芸術祭の総合案内所を設置するほか、会場となる島々や本土側の港等にも案内所を設置し、作品やイベントの案内、交通機関や作品施設での混雑情報など芸術祭に関する情報を提供します。

設置に際しては、地元市町等と連携しながら、効率的な開設時間、人員配置を検討します。また、外国語対応が可能な人員の配置や翻訳アプリ等のツールの活用により、海外からの来場者への案内を充実させます。

案内所種別	業務内容
総合案内所 ・高松港	・芸術祭に関する総合案内 ・各会場の作品やイベント、宿泊、交通等の総合的な案内 ・作品鑑賞パスポート、ガイドブック、グッズ等の販売 ・重点的な外国語対応 ・Wi-Fi 環境の整備 ・観光地等の案内
案内所 ・各会場の島や本土側の港等	・島内の作品やイベント、宿泊、交通等の案内 ・作品鑑賞パスポート、ガイドブック、グッズ等の販売 ・外国語対応 ・Wi-Fi 環境の整備 ・観光地等の案内

第８章　芸術祭サポーター

8-1　方針

アーティストと地域をつなぎ、作品と来場者を結ぶ役割を担う重要な存在となるのが国内外から集まるサポーターです。作品制作や会期中の作品やイベントの運営、会期外における島の地域行事への参加など、多くのサポーターが関わって芸術祭を盛り上げることができるよう、関係組織の育成や連携に取り組みます。

8-2　ボランティアサポーター「こえび隊」

8-2-1　取組みの概要

芸術祭 2010 の際に組織されたボランティアサポーター「こえび隊」が引き続き芸術祭を支えます。こえび隊事務局機能を担う「NPO 法人瀬戸内こえびネットワーク」が中心となり、各種メディアやＳＮＳ等を活用し、広くこえび隊への参加を呼び掛け、既に活動しているこえび隊メンバーには、継続的な活動の中で、新しい参加者への情報共有や、アドバイスなど活躍の幅を広げてもらい、こえび隊の一層の育成・強化を目指します。

8-2-2　具体的な取組み

こえび隊が芸術祭サポーターの中心となり、地域サポーターや企業サポーター等と協力しながら、芸術祭や地域に深く根ざした活動を通して、島と人をつなぎます。

会期前には、アーティストや地域住民と共に作品制作を手伝い、会期中には、作品受付や島内ガイドを行うなど、来場者がよりスムーズに充実した作品鑑賞ができるよう取り組みます。

さらに、会期外にも、島の地域行事や文化活動に参加するなど、住民との交流の機会を創出し、地域活性化の取組みを支えます。

また、こえび隊への新規加入者を増加させるとともに、すでに活動しているこえび隊メンバーのスキルアップを図るために、勉強会やミーティングを開催し、芸術祭の趣旨やこえび隊の活動内容についての理解を深め、作品や島に関する知識の習得を目指します。

8-3　企業・団体ボランティアサポーター

8-3-1　取組みの概要

地域住民や地元企業・団体、学校など、地域を最もよく知る人たちが芸術祭に関わり、支えてくれることが、来場者へのおもてなしや、継続的な地域活性化の観点から重要です。前回の芸術祭では、多く

の地域住民が作品の制作に始まり、受付や島を挙げてのおもてなしに参加し、また、企業ボランティアの方も作品受付に加わり、来場者との交流を深めました。今回も引き続き、地域におけるサポーターを増やしていく取組みを行っていきます。

8-3-2　具体的な取組み

地域住民の方に向けて、学校や公民館などで説明会を開催し、芸術祭サポーターへの参加を働きかけます。

サポーター活動を行うことが、アートを通じた地域振興を学び、来場者や島民とのコミュニケーションを図る場となることから、香川・岡山の大学を中心に、インターンシップや履修科目の一環としての学生の参加を働きかけていきます。

地元の企業や団体を訪問し、芸術祭の趣旨やサポーター活動の重要性について説明し、サポーター活動への参加を働きかけます。

第９章　チケット、グッズ開発

9-1　方針

9-1-1　基本的方針

来場者にできるだけたくさんの島を巡り、多くの作品を楽しんでもらえるような利便性の高いチケット制度を検討します。また、芸術祭の思い出を持ち帰ることができるよう、魅力のあるグッズの開発を検討します。

9-1-2　取組みの概要

チケットについては、利用者のニーズに対応し、分かりやすく利用しやすい仕組みを検討します。

グッズについては、オフィシャルグッズの開発や、関連商品の取扱いを検討します。

9-2　チケット

9-2-1　制度概要

来場者の多様な旅行形態に適した作品鑑賞パスポートを開発します。

単体で作品を鑑賞する場合の個別鑑賞料は、作品に応じて適正に設定します。

9-2-2　販売方法

パスポートの販売管理及び販売チャネルの充実を図るため、チケット管理センターを設置します。

また、来場者がパスポートを購入しやすい環境を整備します。

9-2-3　割引協力施設

芸術祭会期中、作品鑑賞パスポートの掲示で、入場割引やプレゼントなどの特典が受けられる割引協力施設を募集し、来場者の利便性向上に努めます。

9-3　グッズ開発

できるだけ早期に委託事業者の選定作業等を進め、消費者のニーズに応じた魅力のあるグッズの開発を行うとともに、より多くの来場者の手に届くよう、効果的な販売戦略を検討します。

第１０章　企業との関わり

10-1　方針

芸術祭の盛り上がりは、今や会場となる島々だけにとどまりません。さまざまな主体が芸術祭に呼応して行う取組みが、全国、世界に広がりつつあります。

プロモーション活動などにおける企業等との連携、瀬戸内エリアや香川・岡山エリアで行われる文化事業との連携により、芸術祭の発信力を高めていきます。

10-2　芸術祭への投資

10-2-1　取組みの概要

芸術祭の趣旨に賛同していただける企業等から寄付・協賛を募り、芸術祭と社会とのつながりを広げていきます。

10-2-2　寄付募集の取組み

ウェブサイトやチラシによる案内のほか、ふるさと納税等の仕組みを利用し、芸術祭の趣旨に賛同する幅広い層から寄付を募ります。

10-2-3　協賛募集の取組み

芸術祭の趣旨に賛同する企業に対し、現金、現物提供による協賛を募ります。より多くの協賛を得られるよう、協賛金額に応じた特典の仕組みを検討します。

10-3　パートナー制度

前回に引き続き、一定金額以上の協賛や独自の事業により支援していただける企業・団体を「瀬戸内国際芸術祭パートナー」と称し、さまざまな形で連携を行うことにより、相互の協力関係を築きます。

10-4　サポーター（再掲）

地域を最もよく知る地元企業が芸術祭に関わり、支えてくれることが、来場者へのおもてなしや、継続的な地域活性化の観点から重要です。前回の芸術祭では、企業ボランティアの方も作品受付等に加わり、来場者との交流を深めました。今回も引き続き、地域におけるサポーターを増やしていく取組みを行っていきます。

10-5　せとうち企業フォーラム

企業が文化活動に取り組む意義等について、有識者の講義や芸術祭会場の視察を通じて、企業経営者等の参加者が考え、知見を深める取組みを行っていきます。

第１１章　人材確保

11-1　方針

芸術祭の開催を契機に、地元の住民が中心となり、会場付近の清掃活動や地元の食の提供、来場者への島内ガイドなど、地域の活性化につながる取組みが各島で行われるようになりました。こうした活動が一過性のものとはならないよう、幅広い世代にわたり継続していく機運を高める取組みを行っていきます。

11-2　島間交流

11-2-1　取組みの概要

芸術祭の会場となっている島の住民が他の島を訪れ、他の島の取組みの好事例を参考にしてもらうとともに、島おこしの取組みなどについて情報交換を行うことで、島と島との間における人的ネットワークの形成を支援します。また、そこで生まれたネットワークをもとに、住民が主体となった地域活動の活性化を図ります。

11-2-2　具体的な取組み

島の活性化につながる活動を行っている人、活動の意思がある人を中心に募集し、各島で継続して公開している作品の鑑賞のほか、ART SETOUCHI イベントや地元で開催されるイベントなどに参加し、地元住民と交流する時間を設けます。

また、芸術祭 2022 の開催に合わせ、季節に応じて各島で訪問団を結成し、他島の住民同士が交流する場を設けます。

11-3　学校との連携

香川県教育委員会や地元の高等学校等と連携し、未来の瀬戸内を担う子どもたちを育成するため、会場となっている島々の独自性や国外からの来場者が多い芸術祭ならではの特性などを生かしてさまざまな課外活動等を展開していきます。

11-4　地域の人材育成

芸術祭 2022 の開催に向けて、アーティストが行う作品制作やイベント開催などの活動支援、アートや食の展開を通じた地域住民・ボランティアサポーターとの地域再生に向けた取組みなど、芸術祭をさまざまな角度から支え、地域の活性化を担う人材を発掘し、育成する活動を行っていきます。

第１２章　連携

12-1　方針

芸術祭の盛り上がりは、今や会場となる島々だけにとどまりません。さまざまな主体が芸術祭に呼応して行う取組みが、全国に広がりつつあります。

プロモーション活動などにおける企業等との連携、全国規模で開催されている国際文化芸術イベント等との連携により、芸術祭の発信力を高めていきます。

12-2　県内連携事業

香川県内の市町や団体が実施する建築・アートを主体としたイベントなど、相乗効果が期待できる事業と連携し、芸術祭の来場者が各イベントを巡るよう促すことで、芸術祭の開催効果を広く波及させます。

12-3　広域連携事業

芸術祭の機運醸成や文化的発信を拡大していくため、芸術祭の開催年だけではなく、早い時期から、全国規模で開催されている国際芸術祭と連携し、相互広報を実施します。

第１３章　資金調達

13-1　資金調達

13-1-1　取組みの概要（再掲）

芸術祭の趣旨に賛同していただける企業等から寄付・協賛を募り、芸術祭と社会とのつながりを広げていきます。

13-1-2　寄付募集の取組み（再掲）

ウェブサイトやチラシによる案内のほか、ふるさと納税等の仕組みを利用し、芸術祭の趣旨に賛同する幅広い層から寄付を募ります。

13-1-3　協賛募集の取組み（再掲）

芸術祭の趣旨に賛同する企業に対し、現金、現物提供による協賛を募ります。より多くの協賛を得られるよう、協賛金額に応じた特典の仕組みを検討します。

13-2　パートナー制度（再掲）

前回に引き続き、一定金額以上の協賛や独自の事業により支援していただける企業・団体を「瀬戸内国際芸術祭パートナー」と称し、さまざまな形で連携を行うことにより、相互の協力関係を築きます。

13-3　販売収入（再掲）

前回開催時の利用状況を分析し、来場者の多様な旅行形態に適した作品鑑賞パスポートを開発し、パスポートの販売管理及び販売チャネルの充実を図るため、チケット管理センターを設置します。

また、グッズ販売については、できるだけ早期に委託事業者の選定作業等を進め、消費者のニーズに応じた魅力のあるグッズの開発を行うとともに、より多くの来場者の手に届くよう、効果的な販売戦略を検討します。